
はじめに

自分だけが生まれる世界を間違えたような気がしていました。

誰かに「そんなことは当たり前だよ」ということができませんでした。

何かがおかしいということに声を上げると「あなたのほうがおかしいよ」となだめられ、論
され続けてきました。

家族に愛されなかったわけではないし、友人ができなかったわけではない。でも、なんだか
ずっと孤独で、僕はきつと生まれてくる星を間違えてしまったのだと、そんな風にずっと思っ
ていました。

とにかく孤独で、その孤独を埋めるように、誰かに合わせ、何かにすがり、時に社会や目に見えない大きなものを呪って生きてきました。「不幸な人生だった」と今でも声を大にして言

えます。

決して不幸自慢をしたいわけではありません。

お伝えしたいのは「あなただけの地獄」を愛してほしいということです。

どこに向かうこともできない、何も触ることのできない静かな「地獄」は僕だけのものだったというこの感覚を共有したいのです。

本書は誰も理解してくれない世界に住んでいた僕が「誰よりも理解していなかった僕自身」と共に歩んできたプロセスを記したものです。

どうかこの本を手にとっているあなたが「あなた自身と共にある」ことができるように、お役に立てていただければと願っています。